

「畏れ」について、、、最近思ったこと。

「社内学校」

平成21年4月8日

株式会社エモーション

代表取締役 香川湧慈

世の中、不景気の風潮が蔓延している。

だからかもしれないが、都会では「経営セミナー」なるものが、流行っている。自分はこの14～15年、所謂（いわゆる）「経営セミナー」の類に参加する際は、個別に目的を持って参加して来た。また、無闇には参加しないことを実践して来た。

常々思ってることは、単に「経営」の勉強をしても経営は良くなる。では、何を勉強するのか。

それは、「人間とは何ぞや」の勉強をすべきではないか。

また「教育」の勉強をしても教育は良くなる。

教育の勉強は「母親」の勉強をするのが大切と思う。

歴史上の「人物」で、或いは、身近で尊敬出来る人があれば、その「人物」の母親は、どう子供を育てて来たのか。その母親自身は、どのような生き様をして来たのか。を学ぶべきではないか。

結論から言うと、知的理解だけでは「意味」が無いのである。

「モノ」にならないのである。

人は何故「自覚」が出来ないのか。「肚」が据わらないのか。

それは、「畏れ」を知らないからである。

「畏れ」とは、「自分を律する心構え。」「自分は何を以って、立つのか。」

ということである。

全てに於いて「畏れ」を持たない限り、全ての学びは、単なる「知識」にしか過ぎない。

自分の成すべき事をハッキリさせてから、学んで行かないと「意味」が無いのである。

神社に多くの人々が自分個人の願いを叶えに参拝している。

では、その人達に問う。

神さんから、こんな風に言われているのが、聞こえないのか。と。

「お前は、神から願いを叶えてもらうだけの資格がある人間なのか。

それだけの価値がある人間なのか。」と。

故に、己に確固たる「自覚」と「肚」を持って、神の御前に立つことが、礼の道ではなからうか。と。

人間も同じ。相手に会った時、その人から何を学んだのかを、相手に見せることが礼の道である。どんな人と会っても、である。

人が礼（お辞儀）をする時、どこが見えるか。己の足元が見えるのである。

つまり、礼とは、自分の足元を見つめる自己反省のこと。

相手に対して自己反省しつつ、その人に対して、自分が何を以ってお役に立てるのかを考え、行動することが、礼道である。

神社参拝の心構えは、己の志は何なのか。その志を覚悟して、肚を据えて、神に祈るべきではないか。「祈り」とは「いのり」つまり「意宣り」。

己の意を宣言することなのである。

日本人は、生まれながらに「悟っている」という魂を具えている。

という考え方が神道にはある。

だから、この悟りを、どう生かして行くのか。の為に学んで行くという行動が生じて来る。*中国は、「これから悟って行く」という思想である。

昔から、日本の先哲達が言うことに至言がある。

「師を求むるなかれ、師の求むるものを求めよ。」と。

何を為し、何を成すんだ。という覚悟を持つ。

自覚＝生まれながらにしての役割を自覚するという事。

自分は、何の為に生まれて来たのか。何をこの世で為し、何を成すのか。を、自問自答し続ける中で、素直になり、自己反省し、己の心の良心に耳を傾けることで、芽生えて来る。

自分の中に、自分でしか出来ない役割を果たして行くことを悩むのである。

その悩みの中で、泣き叫べば良い。そして、その後スッと忘れる。流すこと。

ひたすら、己の血（己の良心）の雄叫びに耳を傾けよ。

それで、被った因縁は、全て受け入れれば良いのである。

つべこべ言わず、淡々とこなして行けば良いのである。